

## セッション：経済学とフランス革命

——コンドルセ・マルサス・D. スチュアート——

久保 真\*

経済学は18世紀啓蒙の時代に生まれた。が、今日の経済学がチュルゴやスミスらが誕生せしめた頃のままであるというわけではない。こうした経済学の変転における最初期の、そしておそらく最も重要な契機のひとつは、フランス革命であろう (Forget, “Sophie Condorcet,” in *Faith, Reason, and Economics*, edited by D. Hum, 2003)。この大きな混乱の時代、経済学はみずからに多くの可能性があることを示していた。このことを理解する上で作業仮説のひとつを与えてくれるのが、ウォーラースタインの考察であろう。曰く、フランス革命を機に急進主義・保守主義・自由主義という近代社会を規定するイデオロギーが誕生したのだという (Wallerstein, *After Liberalism*, 1995; 阪上孝「ウォーラースタインの21世紀観」『龍谷大学経済学論集』51(4), 2012)。確かに、こうした新たな思想枠組の出来は経済学と決して無縁ではなかったであろう。例えば、友人チュルゴの伝記を著しスミスを熱心に読んだコンドルセは、革命が恐怖政治に傾くなかでもなお、政治的自由と経済的自由は相互促進的でありうるしそうでなくてはならないとして、人間をして完成へと至らしめんとする急進的な展望に希望を託した。18世紀末にマルサスが筆を執ったのは、こうした展望に抗してであった。スミスに私淑するイングランド国教会の牧師補によれば、人類は人口原理という自然法則——神によって定められた法則であると同時に、経済的メカニズムによって現象する法則——によって窮乏や悪徳に運命づけられているのであって、自然法則に抗って社会秩序を変更しようとするいかなる試みも結局は失敗に帰するのだという。こうしたフランス・イングランド両国のスミスの弟子二人に大きな影響を受けつつ乗り越えようとしたのが、スミスの母国スコットランド出身のD. スチュアートであった。彼は、自らの信じる社会の漸進的な改善へ資するものとして、経済学を提示した。

こうした作業仮説に導かれて企画された本セッションは、三本の報告からなり、それぞれコンドルセ・マルサス・スチュアートを対象とする。特に注目するのは、フランス革命期の時流のうねりのなかで、どのような課題が経済学に突きつけられたのか（下層階級の貧困・民衆教育・経済学の科学性 etc.）、そしてそれに対応すべく経済学をどのように変容させていったのか（チュルゴ・スミス etc.との連続と不連続）、という点である。

とはいえ、三報告は、むしろ、コンドルセ・マルサス・スチュアートいずれもが急進主義・保守主義・自由主義というレッテルに必ずしも収まりきらない要素を別掲するものとなっている。にもかかわらず、いやだからこそと言うべきか、この時代の経済学の諸特徴が、セッション全体を——三報告のみならず、討論者とのまたフロアとの質疑応答をも——通じて、浮かび上がってくれればと考えている。

---

\* 関西学院大学; [GAG02147@nifty.ne.jp](mailto:GAG02147@nifty.ne.jp)